

# 情報活用能力を發揮して、自信をもって表現する子の育成 —GIGA 端末を活用した、主体的・対話的で深い学びをとおして—

長谷川英司\*  
Eiji HASEGAWA

\*京都市立第四錦林小学校  
Kyoto City Daiyon Kinrin Elementary School

**あらまし**：「表現力」に焦点を当て、計画的に情報活用を繰り返すことで、学習の基盤となる情報活用能力の厚みが増すと考えた。本校では、GIGA 端末を文房具として活用し、主体的・対話的で深い学びをとおして、自信をもって「話す、書く、表す、発信する、伝え合う」などの表現力の育成を目指している。本研究では、自由研究発表会と学習発表会を通して育成したい表現力の具体的な評価指標を設定し、情報活用能力がどのように高まったかを明らかにしていった。

**キーワード**：情報活用能力、GIGA 端末、カリキュラム・マネジメント、表現力

## 1 はじめに

VUCA な時代を生きる子どもたちには、自ら課題や問題を見出し、情報活用能力を發揮して問題解決していく力が求められる。そのために私たち現場の教員は、GIGA スクール構想で整備された ICT も最大限に活用し、カリキュラム・マネジメントを進めながら授業改善を図ることが重要となる。

本校は「自ら考え判断し、自信をもって行動する子の育成」を学校教育目標とし、教育活動全般において GIGA スクール構想を積極的に推進し、学習の基盤となる情報活用能力の育成が重要な資質・能力であると位置付け取り組んでいる。とりわけ、「情報活用能力を發揮して、自信をもって表現する力」の育成を重点目標として校内研究を進めてきた。情報活用能力の育成に向けては、京都市教育委員会が IE-School における情報活用能力の体系表例をもとにして作成した「情報活用能力アドバイスシート」を下敷きに、学年ごとに関連単元配列表（図1）を作成し、カリキュラム・マネジメントを進めながら情報活用能力の系統的な育成に取り組んでいる。日々の学習活動では GIGA 端末を学習の道具と位置付け、高学年では児童が GIGA 端末を活用する・しないを自分で選択できるようになるなど、主体的な学びにつながることを目指している。

本研究では、令和4年度の自由研究発表会と学習発表会の取組から、表現力育成の評価指標を設定し、児童の情報活用能力がどのように高まったか、また、

継続して表現力を育成する取り組みを行うことによって、児童が意欲的に情報活用能力を發揮して学習に向かっていったかということについて報告する。

## 2 研究の方法

### 2.1 調査対象および調査時期

京都市立第四錦林小学校の全校児童 243 人（令和4年9月1日時点）を対象に実施した。

自由研究発表会は9月5日～8日に学年ごとに実施した。児童にはあらかじめ次の2点を伝えた。「①取組の成果や出来栄えより、自分のやりたいこと、好きなことにとことん取り組むこと。②取り組んだことを9月に発表すること。」この内容は保護者にも説明して協力を仰いだ。児童は9月の自由研究発表会でその成果を発表した。

学習発表会は令和4年11月～令和5年1月の間に2学年（低・中・高学年）ごとに時期を設定して実施した。

### 2.2 分析方法

本校では、育成を目指す資質能力を、いつ、どの学習で育成していくのか可視化するための関連単元配列表（図1）を作成している。関連単元配列表には、学年ごとに情報活用能力を身につけた目指す子どもの姿を明示し、年間を通してカリキュラム・マネジメントを行っている。



表1 発表における表現力の評価規準

要素	話し方				見せ方		
	姿勢	発声	話型	反応	対象	動作	道具
低学年	まっすぐ立って	口をしっかりと開けて、大きな声で			実物を見せて	演技したり、動かしたりして	大きくして
	聞いている人を見て	声の大きさや、話す速さに気をつけて			写真や資料を見せて	指し示して	
	聞いている人が、よく見える場所で						
中学年			間の取り方を考えて	友だちの意見と自分の意見をつなげて		身ぶり手ぶりを入れている	大型テレビに部分や全体を映して
			「です。ます。である。」を使い分けて	聞いている人の表情や反応を見ながら		大事などところに印をつけて(丸やアンダーラインなど)	I C Tを使って(パワーポイントやロイロノートなど)
			大切な言葉や部分を強めに	受け手の反応を確認しながら			
高学年			丁寧語や敬語など、相手や場に応じた言葉づかいで	その場で説明を付け加えて		キーワードを書いたり見せたりして	電子資料や実物などを効果的に用いて(動画も含む)
			事実と意見を区別して	問いかけをししながら			発表に合ったI C Tを選んで
							I C Tの機能を効果的に活用して(アニメーション、音声など)

校内研究の重点目標である「表現力」の育成に向けては、発表における「話し方」と「見せ方」に焦点化した評価規準(表1)を設定した。評価規準の設定にあたり、京都市教育委員会が示す「情報活用能力アドバイスシート」をベースにし、木村が作成した「情報ハンドブック」(2016)を参考にして、低・中・高学年の間で系統性をもたせた内容にした。

本研究では、自由研究発表会、学習発表会の事後に、児童への自己評価アンケートによってデータを収集した。

### 3 結果

アンケートは、表現力について振り返る内容のものと、取組に向かう意欲や関心を問う内容のものに分けて設定した。自由研究発表会の取組が、その後の学習活動につながることをねらったものである。とりわけ学習発表会は、多くの人に見てもらえ、児童の意欲・関心が高まる授業であることから、アンケートをとることで、これまでの経験で身につけてきた情報活用能力や表現力が発揮されているかを確認することができる。

#### 3.1 表現力についての自己評価(表2)

自由研究発表会も学習発表会も、質問項目は次の

2点である。

- ・発表の「話し方」で、よかったところ。
- ・発表の「見せ方」で、よかったところ。

それぞれの質問に対して、「話し方」と「見せ方」で設定した学年別の評価規準内容を選択肢とし、複数選択によって回答を収集した。

表2 表現力についての自己評価結果(一部抜粋)

話し方	3年		4年	
	自由	学習	自由	学習
間の取り方を考えて	15%	18%	21%	19%
「です。ます。である。」を使い分けて	42%	34%	39%	36%
大切な言葉や部分を強めに	18%	19%	14%	19%
友だちの意見と、自分の意見をつなげて	9%	8%	7%	5%
聞いている人の表情や反応を見ながら	16%	21%	20%	21%
見せ方	1年		2年	
	自由	学習	自由	学習
実物を見せて	40%	22%	51%	40%
写真や、資料を見せて	21%	12%	18%	9%
演技したり、動かしたりして	21%	32%	10%	34%
指し示して	4%	3%	18%	4%
大きくして	13%	30%	3%	13%

### 3.2 取組についての自己評価 (表3)

自由研究発表会では、「研究内容をどのようにして決めたか」と「これからも自由研究に取り組みたいか」について質問した。学習発表会では、「自分の頑張り度」と「相手への伝わり度」を5段階の数値で質問した。

回答結果は学年ごとに単純集計し、選択数の占める割合に置き換えて整理した。

表3 取組についての自己評価 (全校結果)

問：自由研究の内容は、どのようにして決めましたか。

自分で考えて	45.6%
本や図かんで調べて	9.9%
インターネットで調べて	17.6%
友だちや家ぞくにおしえてもらって	26.9%
合計	100%

問：これからも、自由研究に取り組みたいですか。

ぜったいやりたい	55.8%
できればやりたい	22.6%
どちらでもいい	13.2%
できればやりたくない	4.7%
ぜったいやりたくない	3.7%
合計	100%

## 4 考察

「表現力についての自己評価」では、学年の発表形式や指導者の意図、これまでの経験の積み重ねなどが結果に大きく現れた。「話し方」(中学年)の結果では、自分の伝えたいことを一生懸命に伝えようとしていることが、『『です。ます。である。』を使い分けて』や「聞いている人の表情や反応を見ながら」の結果から読み取れる。一方で、「友だちの意見と、自分の意見をつなげて」の回答が低かった。聞き手に問いかけたり、意見や感想をもとに内容を広げたり深めたりする経験が不十分であったと考える。時系列で見ると、「聞いている人の表情や反応を見ながら」や「大切な言葉や部分を強めに」の視点は、自由研究発表会から学習発表会へ上昇している。中学年では、正しく、分かりやすく伝えるということを意識していることが読み取れる。

「見せ方」(低学年)の結果では、「実物を見せて」が多いものの、学習発表会では「演技したり、動かしたりして」の割合が増えている。また、「大きくし

て」というICTの操作を伴う割合も増加した。低学年は、そもそも表現方法の種類も経験も少ないので、意図的・計画的に学習を進めていくことで、その種類が増え、表現方法が獲得されていくことが読み取れる。自由研究発表会と学習発表会を関連させて見ていくことにより、自由研究発表会での発表経験を活かし、学習発表会では内容に応じてどのような方法で発表するのが良いかを考え、個人発表とグループ発表の違いや、発表の場に応じた「話し方」や「見せ方」を意識して表現する姿が見られた。

「取組についての自己評価」からは、児童の学習に向かう意欲や態度の向上が見られた。全校集計ではあるが、「これからも自由研究に取り組みたいですか」の質問に対し、79%の児童が肯定的な評価を示した。また、学習発表会の「頑張り度」については87%の児童が、「伝わり度」は77%の児童が肯定的な評価を示した。

否定的な評価も見過ごせない。意欲や関心を高めるためには、学習の目的や方法を明確にすることはもちろんのこと、活動の楽しさを存分に体験、経験させることも大切である。学年のカリキュラム・マネジメントによって、児童の実態に応じた意図的・計画的な指導を実施していくことが求められる。

## 5 結論

今回の研究を通して、児童にとって自ら問題意識を持ち、解決の見通しを持って取り組む学習活動になれば、児童はその成果を自信をもって表現しようとするのが明らかになった。表現力を発揮する場として自由研究や学習発表会を設定したことは適切であったと考える。

一方で、「表現力」はその要素が多岐にわたるため、一つ一つを系統的に育成するような学習活動を設定することは現実的ではない。教科等の内容を俯瞰し、様々な表現方法を意図的に経験する場と客観的な評価指標を設定するカリキュラム・マネジメントが改めて大切であることが明らかになった。

## 6 今後の課題

今回の研究では、自由研究発表会と学習発表会の取組から児童の表現力育成の実態を把握することができた。しかし、評価項目はその内容を実践したかどうかをチェックするものになり、資質・能力がどれくらい身についたかを評価できるものにはなっ

いない。児童や指導者が育成したい資質・能力を客観的に把握できる評価指標を設定することが求められる。また、表現力だけでなく、他の情報活用能力についても評価規準を設定し、客観的に評価していく仕組みを整えることが今後の課題である。

## 謝辞

本研究は、特定非営利活動法人情報ネットワーク教育活用研究協議会(JNK4)の「教育実践・支援のためのプロジェクト研究助成」事業を受けたものである。

## 参考文献

- [1] 文部科学省、「GIGA スクール構想の実現へ」  
[https://www.mext.go.jp/content/20200625-mxt\\_syoto01-000003278\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200625-mxt_syoto01-000003278_1.pdf) (2023年8月アクセス)
- [2] 文部科学省「次世代の教育情報化推進事業『情報教育の推進等に関する調査研究』成果報告書」  
[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/zyouhou/detail/1400796.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/detail/1400796.htm) (2023年8月アクセス)
- [3] 文部科学省「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申)」  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chuko3/079/sonota/1412985\\_00002.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chuko3/079/sonota/1412985_00002.htm)
- [4] 木村明憲『情報学習支援ツール——実践カード&ハンドブック』さくら社、2016